

東海～日向灘 4 連動地震の津波対策と 総社市域の災害の歴史

総社商工会議所

会 頭 清 水 ^{ダン}男

目 次

第1章 東海～日向灘4連動地震の津波対策……1

東南海・南海地震 ……………	1
津波対策表 ……………	2
東海・東南海・南海・日向灘4連動地震 ……………	3
花房家、秋岡家古文書 ……………	4
大阪城天守閣で1854年南海地震被害の瓦版公開 ……………	6
企業・自治体の防災 ……………	8
現在わかっている東海・東南海・南海・日向灘地震の記録 ……	9
2000年前の東海～日向灘大津波 ……………	9
津波対策のまとめ ……………	10

第2章 総社市域の災害の歴史 …………… 11

地域の災害の歴史を調べる ……………	11
総社市域を中心とする主な災害の年表（江戸時代～平成時代）	11
総社市域以外の高梁川流域の災害の年表 ……………	18
岡山県通史に見る災害の歴史 ……………	21
岡山県下の1946年南海地震、1972年・1976年台風被害 ……	23

第3章 防災を科学する …………… 27

東日本大震災を考える ……………	27
岡山県知事への働きかけ ……………	28
山陽新聞への働きかけ ……………	29
昭和南海地震 ……………	30
内閣府検討委員会の発表 ……………	31
中央構造線 ……………	31
海洋資源国日本 ……………	31
大津波以外の4つの危機 ……………	32
終わりに ……………	34
参考資料 ……………	35

第 1 章 東海～日向灘 4 連動地震の津波対策

（東南海・南海地震）

1993年に北海道南西沖地震が発生し、奥尻島へ津波が押し寄せ、ある集落では殆どの人が亡くなった。地震の規模を表すマグニチュード(M)は、7.8で地震発生からわずか5分後に最高30mの津波が押し寄せ、夜10時だったことも重なって230人の犠牲者という大きな被害となった。

そのニュースに接して、私は大きなショックを覚え、それ以来津波について調べるようになった。そして、東日本大震災の起こる2年前に、山陽新聞夕刊のコラムに東南海・南海連動地震による津波への対策を書いたので紹介する。

一 日 一 題

東南海・南海地震

総社商工会議所会頭

清水 男

東南海・南海地震は、今後三十年以内に50～70%の確率で発生すると国が予想している。その予測規模はM8・6で阪神・淡路大震災の約百倍の大きさになる。その地震は東南海地震と南海地震が連動して起こるものであり、百～百五十年ごとに発生している。

岡山県備前県民局の資料によると、一八五四年にM8・4の南海地震が起きた時は、岡山県内で最高5mの津波が発生した。次に起きる地震はその二倍の大きさで、それ以上の津波が岡山に来る可能性があり、地球温暖化による海面の上昇や、岡山県が他県に比べ干拓地が多いことを考えると、その被害が心配される。昨年九月にニュースで、インドネシア・スマトラ島沖でM8・4の地震が発生し、5m以上の津波が発生したと報じられた。数年前に発生した地震ではインド

ネシアで二十二万人が死亡したのに対し、犠牲者は十人ほどであり、犠牲者が少なかったのは、前回の地震の教訓で、地震発生直後に住民がただ逃げたというのが理由である。

徳島県の旧家に伝わる文書には一五二一年から一八五四年までに起きた四回の地震の記録が残っている。最初の地震の津波では、その地域の三千七百余人が亡くなったが、最後の地震の津波では高さが9mあったのに亡くなったのは八人であった。この違いは「津波は矢よりも速く襲ってくるので、何一つ持たず、手近な高い所に避難すべき」と伝えたことによる。

地震被害の中で津波の恐ろしさを認識し、一人一人が家族や知人を助けるために、住居や仕事場の海抜や状況を調べ、自分ともう一人の命を救うため、浮輪代わりのペットボトル大を二個持って、近くの高い所へ逃げる訓練をするべきだと思う。

(津波対策表)

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、2万人の方が亡くなり、その9割以上が津波による溺死である。10m以上の津波の中、助かった人の話を新聞記事で見ると、がれきの中にぽっかり空いた光の差し込む所へ泳いで上がって行き、首が地上へ出て命拾いをしたと言っていた。もし深夜大震災が起こっていたら、この人は助かっていなかったかもしれない。私とその数年前考えた方法は、空の2ℓのペットボトルを首の下に置けば、昼はもちろん夜でも水の中を浮いて、首だけでも地上に出て、助かる可能性が高くなる、というものである。そしてもう一つ空のペットボトルを持っていれば、それを他の人にあげてその人を助ける事が出来る。ペットボトルは、ただで手に入るし、河川の氾濫にも浮輪代わりになり、車に積んでおけば川で溺れている人を助ける事も出来る。又、冬に震災に遭ったり遭難した時、沸かした湯を入れれば、湯タンポがわりにもなる。こんな優れものの空のペットボトルを常備することを強く薦める。

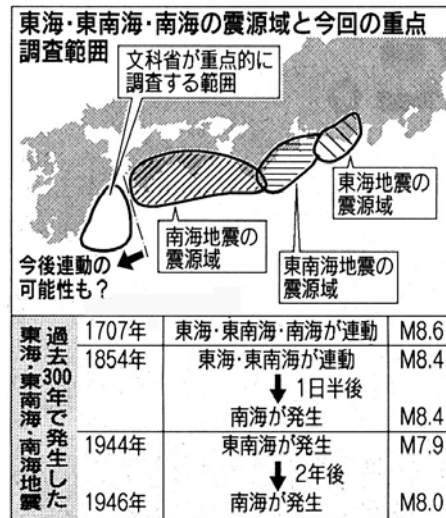
次に、文の中で、インドネシアや徳島県の旧家の例をとり、最初の津波ではどちらも多くの犠牲者が出たが、最後の津波ではどちらも犠牲者が少なかった。その理由は、最後の時は地震発生直後に住民がただ逃げたからである。津波から助かるには、逃げるのが最善の策ということがわかる。その為には、自宅や仕事場などの標高を調べ、避難が必要な場合、避難先までの距離を調べ、距離を67mで割ると避難先まで歩いて何分かかかるかがわかる。それがわかる「津波対策表」というものを作ったので活用されたい。

津 波 対 策 表		標 高	避 難	避 難 先	標 高	距 離	徒歩 (時速 4km)	距離 67m	2L 空ペット ボトル所有数
	自 宅	m	要 不要		m	m		分	個
	出 先	m	要 不要		m	m		分	個

(標高とは東京湾平均海面からの高さ)

(東海・東南海・南海・日向灘 4 連動地震)

2007年に文部科学省が東海～南海地震について発表した時、宮崎沖の地震空白地域について地質調査をして、地震の有無を調査すると発表した。



日本経済新聞 2007 年 12 月 1 日付

発表した表では過去300年間の地震について書かれてあるが、それを過去500年間にさかのぼると、徳島県田井家の古文書によると、1512年の津波では、地域の3,700 人余が亡くなり、1605年の津波では、1,500 人余が亡くなったが、1854年の津波では津波高が9 mあったのに、田井家の当主が避難を誘導して死者は8人であったと記録が残っている。

東日本大震災から一ヶ月後、2011年4月7日文部科学省は、地質調査の結果1707年には、東海・東南海・南海に加え、日向灘も連動して地震が起こった可能性が高いと結論づけた。その震源域は、700kmに及び、東日本大震災の震源域500kmより長く、1707年は、M 8.6ではなくM 9.0 以上であった可能性がある」と発表した。今後起こる地震が4 地震連動となるとM 9.1 になる可能性があり阪神淡路大震災がM 7.3 でMが0.2 上がる毎に地震の規模は2 倍になるので、M 9.1 はその500 倍の予測規模になる。

そうなると津波の及ぼす影響も大きくなり、更なる対策を講じていく必要がある。

なお、東海地震は1854年以降160年間起こっておらず1944年の東南海地震がM 7.9、そして1946年の南海地震がM 8.0 と地震の規模が小さく、地震エネルギーが残っていると考えられる事と、数百年毎に4つの震源域が連動して動いているので、次に起こる東海～日向灘の地震は同時に起こる可能性が高い。

(花房家、秋岡家古文書)

2007年5月、岡山県備前県民局が「岡山県南部における南海地震の記録」という冊子を作った。私の所属している岡山経済同友会の政策委員会で、この冊子を手にする機会があり、その内容は過去の東南海・南海地震の記録を良く調査していて画期的ですばらしいものであった。その中に1854年に起きた南海地震について花房家、秋岡家の古文書に津波のことが書かれている部分があり、そこに私は注目した。

① 東南海地震
寅十一月四日朝五ツ時（午前八時）地震甚だしく
② 南海地震
一同驚き申し候ところ翌五日晩七ツ半時（午後五時）
前代未聞の大地震にて、いづれも家より飛び出し、
牛馬に至る迄追い出し火の用心いたし候ところ、
自分宅は山屋敷地堅く震え軽く少しも損じこれなく、
沖合下市・河本・立川辺で格別甚だしく、
道筋拾間（約一八m）ばかりも下市・河本の境
古川筋に割れ目でき、
同所田地五寸（約一五cm）ばかりも高低相い成り、
割れ目付き候ところよりは青どべ吹き出し
又はどろ水吹き上げ麦田を水流れ、あるいは、
あら田長く割れ目でき、家宅は大地震にて
棚などにこれ有るものは悉く落ち損じ、
戸障子倒れ屋根うだれ瓦落ち、砂川堤防筋の家は
柱五、六寸（約一五〜一八cm）ばかりもずり込み
箱棟煙出しなどは段々下市・立川辺で落ち損じ申し候
右五日晩の地震の砌西南の方より地鳴り、大筒を
続けこれ搏つ如く大響きいたし、誠に以て恐ろしく
衆人顔色変し申し候、かようの村々は家少々ねじれ
又跡も恐ろしくその儘家の内へ這い入り申さず
門と又は藪などに歩行板を並べ小屋掛けいたし、
③ 家内中諸とも野宿にて夜を明かし候、
右五日夕四ツ頃（一〇時頃）又大地震引き続き
④ 六日朝迄治まり申さず……
大津波
海辺は大津波上がり所に寄り人家とも一緒に引き退き
申し由、沖新田は唐樋を損じ本家潰れ新田には段々
これ有り、とかく平地甚だしく瀬戸下村、檜原、
西大寺当たり破損夥しく、邑久郡豆田、尾張辺には
潰家数多くこれ有り、土塀は大体残らず倒れ申す由、
所どころ鳥居石灯籠の損じ多く……

花房家古文書は、岡山県東南部の被害状況を記している。1854年12月23日午前8時頃（旧暦11月4日）起きた東海・東南海地震の記述が①であり、翌日12月24日午後5時（旧暦11月5日）の南海地震の記述が②である。どちらもM8.4であるが記述では南海地震が「前代未聞の大地震」とあり、その後被害の状況を述べている。最近の地質調査

では、日向灘（宮崎沖）地震も引き続き起こった事が確認されており、南海地震の約5時間後の夜10時頃起きた③の記述の「又大地震引き続き」が日向灘地震ではないかと思われる貴重な資料である。

南海地震による津波の岡山への到達時間は約2時間半後であり、12月であるので暗い夜のうちに津波が到達したと考えられ、日向灘地震による津波も到達したと考えたと夜に何度も津波が押し寄せたと推測できる。

ここで注目すべきは④「海辺は大津波上がり所に寄り人家とも一緒に引き退き申し由」以下各地の惨状を述べている部分である。今回の東日本大震災は、昼起こった事とビデオカメラの普及により惨状を目の辺りに見ることが出来た。「人家とも一緒に引き退き」という状況が今回の津波の被害の惨状に重なって見える。

次に倉敷市川入の名主秋岡惣五郎が地震直後、主に倉敷地区を歩いて惨状を記録した秋岡家文書の中で津波について記述があるので紹介する。

秋岡家文書「先考遺筆」 川入村（現倉敷市川入） 名主秋岡惣五郎が、地震直後に岡山近辺まで歩き、惨状を記録したもの。記述は精彩に富み、被災現場での液状化の様子などが克明に記されている。

①川入にては、或いは本家・長屋一棟同様に付きおり申す分、震え候時分は凡そ一尺五寸程（約四五cm）づつ明き、是にて考え候へば、瓦葺きにて上の重き家は、一尺五寸、二尺（約四五～六〇cm）もかたむき候哉に存じられ候、家々壁割れ、間には落ち候ものもこれ有り、ひさしなども痛み、落ち候もあり

②大内村にては東の方北より南へ通し大痛（大損害）、家々ひさし落ち、家ねじれ、地割れ、五寸位（約一五cm）口を明け、青きどろを吹き出し候処もこれ有り、また田地二、三尺（約六〇～九〇cm）もおし出し、すき畑大にゆがみ候もあり、又一間方、二間方（約一・八～三・六m）地面すり込み、その土いづれへ行き候哉相知り申さず、不思議千万

③下辺四十瀬新田の辺にては家も大痛、間には四、五寸（約一二～一五cm）より一尺位（約三〇cm）も地中へすり込み候もこれ有り

④水江村にくり綿商い仕り船積み場所、川原へ出し候俵、数積みかさね置き候ところ、地震にてくずれ、折り節し砂場大いに割れ、その割れ目へ一俵転び込み、その上へ砂かかり候……

⑤中島新田にては、ひさしなど落ち、急ぎ外へ出で候得ども、地面割れ甚だ危うくに付き、歩行板又ははしごなどに乗り居り申し候由、尤もたちながらは居られずと申すくらい

⑥定杭大痛、潰家十三、四軒、半潰多く、無事なる家はなし、撫川・庭瀬の内にも七、八軒潰れ、撫川大橋横より込み、橋落ちる、その後定杭は目もあてられぬ事に候

⑦びくに橋三、四軒潰れ、地面ひくくなり候田地もこれ有り、又青土吹き出し候処もこれ有り、一宮も大痛に候へども、撫川程にはこれ無し

⑧浜村の内中樋の東、田の中に青土吹き出し居りと申すに付き、見物に参り候所、所々に穴明き吹き出し申し候由、吹き出す時分は凡そ二、三尺（約六〇～九〇cm）も吹き上げ申し候、その穴へ三間（約五・四m）くらいの棒は少しも障りなしに這入り申し候

⑨山寄りの村々は痛み数無く、子位庄・浅原・西坂・生坂辺は家・壁などに痛みなし

⑩びくに橋は大痛に候へども、二丁か三丁か（約二〇～三三〇m）行き、野殿村は痛み数無く、往来より北手山に付き候家は痛みなし、往来より南手へこれ有る家は壁損じ居り申し候

⑪庭瀬・撫川・定杭は格別大痛に候へども、花尻にては一向に損じこれ無し

*岡山にても二軒、三軒づつ所々に潰れ家これ有り

*御野郡大痛みの由、上道新田は別して大痛み候、家たおれ、又はすり込み数多き由

*そのほか海岸大損の由、児島郡にて朔日十二月より一丈五・六尺（約四・五～四・八m）高く来たりと後日に承り候

ここで注目するのは、「その他海岸大損の由、児島郡にて朔日 12 月より 1 丈五、六尺高く来たりと後日に承り候」の部分である。そして、この文は後日つけ足したものである。

私なりに訳すと「その他の被害は海岸は大きく壊され、倉敷市児島で 12 月 1 日、南海地震の翌月、約 4.5 ～ 4.8m の津波が高く来たと聞いた」となる。

数年前、台風と満潮が重なって岡山・香川で高潮による大きな被害が出た。また、過去には、倉敷市福田に千人塚というのがあって 1884 年の台風による高潮で 500 人以上が亡くなり慰霊碑が建立されている。紀伊方面から来る潮と九州方面から来る潮がぶつかるのが、岡山、香川あたりで、台風による高波や津波もその原因で高くなるのではないかと考える。

さて、来る東海～日向灘地震による津波の警鐘を鳴らしたが、岡山県の防災計画では、津波の最高の高さは 3m で津波による被害は、殆ど無いという予測だった。理由を聞くと、1854 年の南海地震の津波の被害は関西で殆ど無く、関西でも津波の予測は最高 3m だという理由であった。

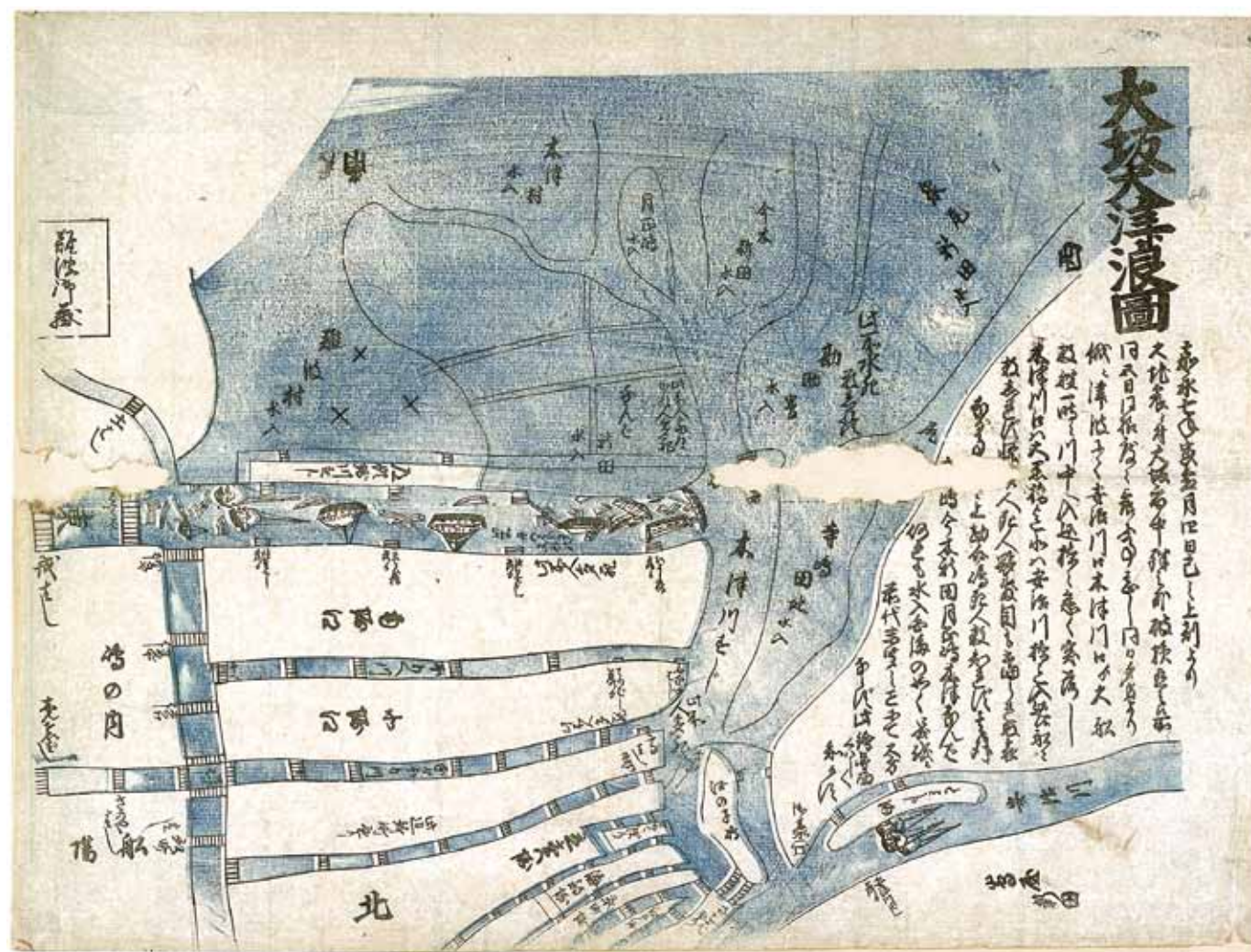
(大阪城天守閣で 1854 年南海地震被害の瓦版公開)

2010 年秋に大阪城天守閣で「秀吉への挑戦」と題して秀吉に対峙した徳川家康を含む全国の武将の特別展をするので毛利を代表して、備中高松城主、清水宗治と八将像、兄備後守宗知の自刃の短刀を借用したいと私に申し出があり協力した。

私は、秀吉の備中高松城水攻めの城主清水宗治と兄の備後守宗知の直系にあたり、大阪城の副主幹北川氏が我が家を訪れた時、数年前に新聞に私が書いた津波の記事を渡し、大阪での津波の予測や、被害の有無を教えてほしいとお願いしたところ、大阪城にはそれに関する資料もあるので又送るとのことであった。

しばらくして私の元に長尾武氏の書いた二冊の本が送られてきた。

一冊は、「安政南海地震津波の教訓」という本で大阪市史として平成 2 年に大阪市が発行している。もう一冊は「水都大阪を襲った津波」で 2006 年に発行していて、こちらの本の中で、大阪市は国の中央防災会議専門調査会が 2003 年 4 月に行った想定を踏まえ、来る東南海・南海地震 M8.6 の津波最高を 2.9m としている。しかし同じ本の中に 1854 年南海地震 M 8.4 の大阪市域の津波最高は、「近代年代記」「大地震大津波末代断画種」では 1 丈（約 3m）とし「住友家史乗裕明鑑抄」「末代控」「浪速の震事」では 2 丈（6m）となっている。結局地方の史料には過去に高い津波の記録があっても国が予測した通りの事を大阪市も防災計画に取り入れているという事がわかった。



大坂大津波図

(瓦版にみる幕末大坂の事件史・災害史 大阪城天守閣より)

又しばらくして北川氏から2011年3月19日から大阪城で「瓦版による幕末大阪の事件史・災害史」を開催し、展示物に1854年南海地震の津波被害の瓦版もあるので、図録を送ると連絡があった。そして3月11日に東日本大震災が起これ、大阪城で展示した瓦版は全国ニュースにもなり、インターネットでもトップニュースとして扱われた。

大阪市内の被害状況は、河口に停泊していた千石船が津波で河川を逆流、橋を次々破壊しながら道頓堀まで運ばれ、死者は大阪町内の人650人、他国から来た人や身元のわからない人は数千人と報じている。大阪のような都市ではその地域に住んでいる人より、他の

地域から来た人の方が多く被害に遭った事がわかる。このように津波の被害を受けない地域の人も、親族、知人も含め海辺に近づく事があり津波の被害に遭う場合もあるので他人事ではないはずだ。各々が自分の事として、又人を助ける為に津波に対して対策を立てる事が重要であると思う。

諸国の状況を伝える瓦版では、東海・近畿・北陸まで大きな被害が出た事を伝え、西日本は、海上交通が絶たれた為情報が全く入らず「四国筋はとくと調べて次編に出す」とある。他の瓦版にはその150年前、1707年に起こった 4 連動地震の津波により大阪では水で亡くなった人 7,000 人余、洪水で亡くなった人 1 万人とあり、大阪町内では死者 734 人である。

全国各地で多くの人々が亡くなったにもかかわらず、藩や幕府の記録に残っていないのは、封建社会であった事と、前年 1853 年にペリ一艦隊が来航して外国の侵略の危険性があって弱みを見せないよう被害を隠していたのかもしれない。

大阪城天守閣の瓦版展示が功を奏してか、大阪府は東日本大震災の数ヵ月後、いち早く津波の予想を最高 3m から 6m へ引き上げた。

（企業、自治体の防災）

東日本大震災では企業や自治体にも津波により多くの犠牲者が出た。ある地域では 2 つの銀行が被災したが、1 つの銀行では全員命が助かり、もう 1 つの銀行では全員亡くなった。全員助かった銀行では行員が何もせずただ逃げた。全員亡くなった銀行では重要な物を金庫にしまっている間に津波にのまれた。又、津波の報道を見ていると、自治体でも首長がすぐ逃げたところでは全員が助かり、すぐ逃げなかったところでは多くの犠牲者がでている。このような経験から企業や自治体では、地震や津波が起こった時どのように行動するかという防災マニュアルを作るべきだと思う。人の命を救う事を第一に考え、どこに、どのように逃げるか決めておくべきである。

他には、重要なデータが津波で失われても良いように、データを安全な所にバックアップしておく事も重要である。

防災マニュアルを作るにあたっては、営業時間外についても、社員、職員が災害が起こった時どのように対処するかも考えていくべきである。土日、祭日を含めると 4 分の 3 は営業時間外である。よって営業時間外に災害が起こる確率も 4 分の 3 である。企業や自治体の責任として、いろんな場面を想定して、いかに人の命を救うかを考えていくべきである。

(現在わかっている東海・東南海・南海・日向灘地震の記録)

紀元0年前後 (東海・東南海・南海・日向灘4連動プラス琉球海溝) M9.5クラス (私の予想、次項参照)

416年8月23日 (日本書紀に地震の記録あり。日本最古の地震の記録)

684年11月29日 (東海～南海)

794年7月10日 巨大地震 (岡山大学 今津准教授 2012年4月発表)

887年8月26日 (東南海・南海)

987年 (南海 徳島県千光寺の絵馬より)

1096年12月17日 (東海・東南海)、1099年2月22日 (南海)

1361年8月3日 (東南海・南海、伊勢神宮で2011年資料発見)

1498年7月9日 (日向灘) 1498年9月20日 (東海～南海)

1605年2月3日 (東海～南海)

1707年10月28日 (東海・東南海・南海・日向灘4連動) M9.1

1854年12月23日 (東海・東南海) M8.4 12月24日 (南海・日向灘) M8.4

1941年 (日向灘) M7.8

1944年12月7日 (東南海) M7.9

1946年12月21日 (南海) M8.0

(2000年前の東海～日向灘大津波)

高知大学岡村真教授が地質調査をして2000年前の地震は過去3000年間で最大であったと2011年4月に発表した。1707年の地震によるある地点の堆積物は15cmで津波の高さは、25mだったが、その地点の2000年前の堆積物は50cmで、私の仮の計算では、 $25\text{m} \times 50\text{cm} \div 15\text{cm} \div 83\text{m}$ になる。

2012年4月に元東大地震研究所都司嘉宣准教授が1611年に起きた三陸地震の北海道の地層を調べ、津波の遡上高が63mに達した地点を見つけたと発表した。

また1771年に起きた八重山地震による津波は石垣島で高さが85.4mであったと言われている。このように巨大津波は過去起こっていた可能性が高い。

ところで津波が発生する原因は地震だけではない。小惑星の衝突により起こる津波は数十メートルから数百メートルに及ぶ。1908年にシベリアへ落ちた小惑星は、東京都と同じ面積の森林をなぎ倒し、湖を造った。100年に1度位の確率でこのような小惑星は地球に落ちていると考えられており、地球の7割が海なので、150年に1回は小惑星が地球のどこかの海に落ち、その原因で津波が起こっていると考えられる。

話を元に戻すと、数日前、NHKの津波に関する番組で、沖縄の島の地質調査をしている人が出ていて、過去6000年に3回大きく隆起した痕跡があり、巨大地震との関連性を調べていると言っていた。

2000年前発生した東海～日向灘の巨大津波と時期が重なり、東海～日向灘そして琉球海溝が一度に動いたとすると、M9.5クラスの巨大地震が起こった可能性がある。その周期が1500年から2000年だとすると、次の地震が巨大になる可能性があり、日本のみならず太平洋一帯に被害が及ぶ可能性がある。日本の責任として、その可能性があるかどうか研究して、諸外国に知らせ、対策を教える義務があると思う。

私案だが、東海～琉球海溝という1,700kmに及ぶ断層の地震が起こる可能性があるとしたら、国が携帯型酸素ボンベを開発して沿岸の住民に無償で配り、何メートルの津波が来ても2ℓの空のペットボトルで浮き上がれるよう工夫をしたらと考える。

(津波対策のまとめ)

2004年インドネシアで起きたM9.3の地震による大波を英語では「T S U N A M I」と報道した。それからして日本程津波の多い国は無いという事だろう。津波がいつ起こっても対処できるよう準備しておく事が重要であると思う。私の作った津波対策表にあらかじめ記入しておき、役に立てて下されば有難い。

第2章 総社市域の災害の歴史

(地域の災害の歴史を調べる)

20数年前、NHKの教育テレビが特別番組を作った時、備中高松城の水攻めを取り上げ、我が家に伝わる品を取材に来たことがある。番組のタイトルは「天候が歴史に影響を及ぼした」というような題で、その時取材に来た人が、水攻めのあった1582年は記録に残る程雨の多い年だったので水攻めが成功した。もしその年が空梅雨だったら水攻めは成功せず、歴史は変わって秀吉は天下人になってなかったかもしれないと話していた。

天正10年、秀吉は本能寺の変で織田信長が明智光秀に討たれていた事を秘して、城に立て籠もる兵や農民5,000人の命そして毛利と織田の和睦と引き換えに、清水宗治や兄の月清入道（備後守宗知）等へ切腹を申し入れた。申し入れを受け、翌日の6月4日早朝、湖上に舟を漕ぎ出し、城兵、農民5,000人、秀吉・宇喜多軍3万人、援軍の毛利軍4万人の見守る中、清水宗治は月清入道の謡う本誓寺に合わせて舟の上で一差し舞い、見事切腹して果てた。他の3人もこれに続いた。歴史上この様な大舞台での切腹は他に無いと思う。秀吉はすぐ様、京に上り明智光秀を討って天下人へと階段を駆け上がる。

私はNHKの取材以来、水攻めの歴史とあわせて水害の歴史を調べるようになり、ある時1591年に岡山県備前にあった「福岡の市」が吉井川の氾濫で消滅したことを知った。「福岡の市」は西日本有数の市で黒田官兵衛が北九州の一部を所領した時、備前の「福岡の市」のように繁栄してほしいとの願いと官兵衛の先祖が備前福岡にいたことから福岡という名をつけた。その洪水で長い間日本で一番の刀の生産をしていた吉井川沿岸の刀鍛冶が殆ど死に絶え、備前では刀の生産はすたれていった。

今回東日本大震災の被害を見て、私の住んでいる総社市の災害の歴史を調べて、行政に今後の防災に役立ててもらおうと思い、総社ライオンズクラブの事業として総社市の災害の歴史、特に高梁川の氾濫による水害の歴史をまとめようと思った次第である。

この事業を進めるに当たって総社ライオンズクラブ、アイヘルス・社会福祉・献眼献腎推進委員長で総社市長の片岡聡一氏にご尽力頂いた事に感謝申し上げ、合わせて資料作成にご協力頂いた総社市総務課と総社市教育委員会の皆様に深く感謝申し上げます。

(総社市域を中心とする主な災害の年表 江戸時代～平成時代)

岡山県には高梁川、旭川、吉井川の三大河川があり、高梁川は岡山県のほぼ半分、岡山県西部を流域面積に持ち、総社市域は高梁川

下流域にあり、瀬戸内海に面している倉敷市より北に位置する。

総社市域を中心とする主な災害の年表（江戸時代～平成時代まで）

年	月 日	災害区分	出 来 事	備 考
1573～1591(天正年間)		風水害	高梁川氾濫し清音地域に水害あり（都窪郡誌）	
1661(寛文元)	5.29	風水害	高梁川大洪水、美袋地区でも被害甚大（昭和町史）	
1673(延宝元)		風水害	5/14 高梁川大洪水(昭和町史) 5/7・5/28 赤浜で洪水 男女4人 牛2疋死す(総社再発見)	
1687(貞享4)	9. 9	風水害	備前・備中大風雨（岡山県水害史）	
1702(元禄15)	7.28	風水害	備前・備中大風雨で洪水、高潮にて破損（岡山県水害史）	
	8.29	風水害	再び大風雨で洪水（常盤村誌）	
1707(宝永4)	8.19～	風水害	備前・備中大風、洪水、高潮（岡山県水害史）	宝永地震（M 8.4）
	10. 4	地 震	岡山で地震。この年の11月に富士山が噴火し宝永山が出現（岡山の災害）	
1708(宝永5)	6.22	風水害	大風雨がかった（常盤村誌）	
1712(正徳2)	6. 2	風水害	備前・備中大風洪水（岡山県水害史） 中島（現：清音上中島）前にて水位3～4m高	
	7. 2	風水害	再び大風雨で洪水（岡山県水害史） 中島前にて水位3～4m高	
1716(享保元)	6. 8	風水害	備前・備中大風洪水（岡山県水害史）	
1718・1719(享保3・4)		飢 饉	享保の大飢饉	
1721(享保6)	閏7.11	風水害	大風洪水（岡山県水害史） 柿木堤防決壊（水損難渋太平記）	
1729(享保14)	8.19	風水害	大風洪水 備中国中潰家多い（常盤村誌）	
	9.14	風水害	再び大風雨、流家・潰家甚大（常盤村誌）	
1738(元文3)	4. 1	風水害	洪水（常盤村誌）	
	6. 1	風水害	昼ころより増水（常盤村誌）	

総社市域を中心とする主な災害の年表（江戸時代～平成時代まで）

年	月 日	災害区分	出 来 事	備 考
1745（延享2）	6. 4	風水害	高梁川洪水 井尻野村の堤防決壊（十二カ郷用水史）	
1764～1772（明和年間）		飢 饉	現総社市域含む中国地域で旱魃続く、明和の飢饉（昭和町史）	
1778（安永7）		風水害	軽部中島境堤防決壊（水損難渋太平記）	
1781（天明元）		風水害	新本川氾濫 新本観世地区死者約 20 名（新本誌） 大風雨（昭和町史）	
1782・1783（天明2・3）		飢 饉	旱魃で美袋村飢饉（昭和町史）	
1789（寛政元）	6.18	風水害	洪水氾濫す（吉備郡史）	
1792（寛政4）	7.26	風水害	暴風雨秦村福谷では家屋 20 件倒壊（吉備郡史）	
1802（享和2）	8. 6	風水害	備前・備中大風雨洪水（岡山県水害史）	
1805（文化2）		風水害	洪水 井尻野一帯が浸水（岡山の「災害」を科学する）	
1808（文化5）	5.29	風水害	備前・備中大風雨洪水（岡山県水害史）	
	閏6.29	風水害	大風雨洪水（岡山県水害史）	
1811（文化8）	5. 6	風水害	大雨 水位 4～5 mの氾濫（岡山県水害史） 1 丈 3 尺余の氾濫（常盤村史）	
1826（文政9）		風水害	中島境堤防決壊（水損難渋太平記）	
1836（天保7）		飢 饉	大洪水、凶作も重なり翌年まで餓死者続出（昭和町史）	
1850（嘉永3）	6. 1	風水害	柿木・軽部中島・古地村前 3ヶ所堤防決壊大洪水（水損難渋太平記） 大洪水で川筋井堰・土手全壊（昭和町史）	
1853（嘉永5）	8. 8～ 8.23	風水害	8/8 大暴風雨（昭和町史）、8/19 大地震、また 8/22 以降大雨・大風各地で土砂崩れ（総社再発見） 8/23 5～6 mの洪水（常盤村誌）	8/19の大地震は記録に具体的様子の記述なし、記録の信憑性に疑問あり
1854（嘉永7・安政元）	11.15	地 震	11/15 午後6時ごろ地震あり。夜11時ごろにも余震あり。（岡山の災害） 18日まで度々大地震あり、美袋村では地盤に亀裂、底口より青泥噴出し、崖崩、家屋震倒（昭和町史）（※安政南海地震は嘉永7年旧暦の11月5日発生）	安政南海地震(M8.4) 安政元年は旧暦で11月27日から

総社市域を中心とする主な災害の年表（江戸時代～平成時代まで）

年	月 日	災害区分	出 来 事	備 考
1880（明治 13）	7. 1	風水害	高梁川大洪水 美袋地区約 20戸流失,57戸半壊（昭和町史）, 真壁恵地新田20余町歩・民家10数戸流出（常盤村誌）, 槇谷川でも洪水 池田地区でも大被害（池田村治山事業誌・総社市史通史）	
1882（明治 15）	8. 5	風水害	槇谷川洪水 池田地区被害（池田村治山事業誌）	
1884（明治 17）	8. 5	風水害	槇谷川洪水 池田地区被害（池田村治山事業誌）	
1886（明治 19）	9.11	風水害	高梁川洪水 美袋地区 5戸流失, 堤防決壊（昭和町史）, 真壁西堤防決壊（常盤村誌）中原・柿木・軽部など被害	
1893（明治 24）	8. 5	風水害	高梁川洪水 美袋地区堤防決壊（昭和町史）	
1892（明治 25）	7.22	風水害	高梁川洪水 下倉村・日美村・富山村で堤防決壊家屋流失溺死者あり（昭和町史） 堤防持ち堪えるも用水から村内流入浸水（常盤村誌） 足守川堤防決壊三須地区に氾濫す（都窪郡誌）	
1893（明治 26）	10.14	風水害	高梁川大洪水 日美村堤防決壊, 家屋流失63戸, 半壊家屋95戸, 溺死者3人, その他昭和地区内でも被害甚大（昭和町史） 湛井堰・堤防決壊 常盤村人家200戸浸水, 培達尋常小学校校舎1棟倒壊（常盤村誌） 清音村堤防決壊6ヶ所, 三須村十二カ郷用水樋決壊で大被害（清音村誌） 槇谷川流域では比較的被害少（池田村治山事業誌） 湛井堰近郷だけで死者160人（岡山学9） 真備町384世帯のうち19棟のみが残った。死者180人。岡山県下で423人の死者	
			10/11未明から連日の降雨で13日夜半から暴風雨となる。雨量のピークは14日の正午前後。浅尾村（湛井）で湛井の堤防が決壊し, 死者5人, 流壊40戸。高梁川の水位は9.6mで堤防より1m前後高くなる。（現在の堤防の改修前）（岡山の災害）この水害を契機に明治40年に工事着手し, 44年から堤防工事, 大正14年に現在の堤防が築かれた。	
1909（明治 42）	11.10	地 震	撫川町（現岡山市）で強震（岡山の災害）	「岡山の災害」の他には記述なし

総社市域を中心とする主な災害の年表（江戸時代～平成時代まで）

年	月 日	災害区分	出 来 事	備 考
1927（昭和2）	3. 7	地 震	北丹後地震（M7.3）	
1934（昭和9）	9.20・21	風水害	室戸台風。ただし、高梁川の総社市から下流は大正末期に改修し堤防が耐え安泰であった。（岡山の災害） 旭川流域では死者145人	
1943（昭和18）	9.10	地 震	鳥取地震（M6.0）	
1945（昭和20）	9.17	風水害	枕崎台風 吉井川流域で死者不明者129人。上流の英田郡、勝田郡河川氾濫	
1946（昭和21）	12.21	地 震	21日午前4時15分ごろ発生。安政元年依頼の大地震（岡山の災害） 岡山県で51人の死者	南海地震（M8.0）
1947（昭和22）	7. 9	風水害	9日から10日の雨量は約65ミリ。吉備郡総社町井尻野の岡山・新見間の県道土砂くずれ（岡山県気象災害誌）	
1954（昭和29）	9.25～26	風水害	洞爺丸台風。25日から27日の雨量は約50ミリ。岡山市の瞬間最大風速は秒速35.2m。総社市：負傷者8人、全壊60棟、半壊49棟、床下浸水30戸ほか（岡山県気象災害誌）	
1956（昭和31）	8.27～30	風水害	26日から31日までの雨量は約100ミリ。新本川支流の木村橋が流出（岡山県気象災害誌）	
1966（昭和41）	5.21～22	風水害	20日から23日までの雨量は約150ミリ。総社市で山崩れ2件（岡山県気象災害誌）	
	6.30～7.1	風水害	31日から2日の雨量は100ミリ前後。総社市：田が20ha冠水（岡山県気象災害誌）	
	9.17～18	風水害	9日から10日の雨量は約150ミリ。総社市：床上浸水2戸、床下浸水3戸、山崩れ2件など（岡山県気象災害誌）	
	9.23～25	風水害	台風24号と秋雨前線。23日から25日までの雨量は約95ミリ。総社市：道路破損2件（岡山県気象災害誌）	
1967（昭和42）	7. 8～9	風水害	7日から10日の雨量は約170ミリ。総社市：堤防決壊1箇所（場所は不明）（岡山県気象災害誌）	
	7.11～12	風水害	11日から13日の雨量は約97ミリ。総社市：全壊1棟ほか（岡山県気象災害誌）	
1968（昭和43）	7.15～16	風水害	総社市：床下浸水35戸（岡山県気象災害誌）	

総社市域を中心とする主な災害の年表（江戸時代～平成時代まで）

年	月 日	災害区分	出 来 事	備 考
1970（昭和 45）	5. 6～ 7	風水害	6日から8日の雨量は約50ミリ。総社市：7日に谷川が氾濫、裏山の土砂が流出（長さ50m、幅10m、厚さ3m）、家屋半壊1棟、非住家1軒、道路損壊5箇所（岡山県気象災害誌）	
1971（昭和 46）	6.27～28	風水害	総社市：28日に土砂崩れ（場所は不明）（岡山県気象災害誌）	
	7. 1	風水害	30日から2日の雨量は約80ミリ。総社市：負傷者1人、半壊1棟ほか（岡山県気象災害誌）	
1972（昭和 47）	7. 9～13	風水害	過去に例を見ない水害 総社市：雨量291.5ミリ、日最大116.5ミリ、時間最大25ミリ 総社市：重症1人、軽症2人、全壊2棟、半壊2棟、床上浸水68戸、床下浸水150戸 堤防崩壊：総社 - 高梁間で数ヶ所の堤防が崩れる。 総社市秦で土砂崩れ 日羽の最高水位：7/12 6時 8.38 新成羽川ダム放流：ピーク12日午前3時 毎秒2,774m ³ （以上の記録は岡山県作成「昭和47年7月災害誌」） 岡山県下では死者14人（岡山県警本部調べ）	
1976（昭和 51）	9. 8～13	風水害	台風17号と前線 県東南部に豪雨 総社市付近は8日から14日の雨量約450ミリ 総社市：負傷者2人、半壊7棟、床上浸水102戸、床下浸水572戸、橋梁流出（場所不明）3件、堤防決壊（場所不明）2件、山崩れ64件ほか （以上の記録は岡山県気象台作成「岡山県気象災害誌」） 岡山県下で死者18人（岡山県警本部調べ）	
1995（平成 7）	1.17	地 震	阪神淡路大震災（M 7.3）	
2000（平成 12）	10. 6	地 震	鳥取県西部地震（M 7.3）	総社市で震度4
2001（平成 13）	3.24	地 震	芸予地震（M 5.5）	総社市で震度3

総社市域を中心とする主な災害の年表（江戸時代～平成時代まで）

年	月 日	災害区分	出 来 事	備 考
2011（平成 23）	9. 2～ 4	風水害	台風 12 号 総社市久代で 2 日から 3 日の 43 時間雨量 198 ミリ。日最大 166 ミリ 時間最大 30 ミリ。 雨量に限れば昭和 47 年より多い。 日羽の最高水位：10.33 m。酒津の最高水位：10.26 m 上流ダムの放流：ピーク 3 日 12 時前後 毎秒 2,029m ³ 総社市：床上浸水 7 戸、床下浸水 62 戸 市内 6 箇所に避難勧告	

（注）○数値、日時などは、手元にある資料をもとに作成したもの。そのため、他の資料と比較した場合に数値等が異なる場合がある。
○同じ災害でも数値等が異なるものは、多い数値を記述した。

地震のみ抽出

年	月 日	災害区分	出 来 事	備 考
1707（宝永 4）	10. 4	地 震	岡山で地震。この年の 11 月に富士山が噴火し宝永山が出現（岡山の災害）	
1854（嘉永 7・安政元）	11.15	地 震	11/15 午後 6 時ごろ地震あり。夜 11 時ごろにも余震あり。（岡山の災害） 18 日まで度々大地震あり、美袋村では地盤に亀裂、底口より青泥噴出し、崖崩、家屋 震倒（昭和町史）（※安政南海地震は嘉永 7 年旧暦の 11 月 5 日発生）	安政南海地震（M 8.4） 安政元年は 旧暦 11 月 27 日から
1909（明治 42）	11.10	地 震	撫川町（現岡山市）で強震（岡山の災害）	「岡山の災害」の他 には記述なし
1927（昭和 2）	3. 7	地 震	北丹後地震（M 7.3）	
1943（昭和 18）	9.10	地 震	鳥取地震（M 6.0）	
1946（昭和 21）	12.21	地 震	21 日午前 4 時 15 分ごろ発生。安政元年以来の大地震（岡山の災害） 岡山県で 52 人の死者	南海地震（M 8.0）
1995（平成 7）	1.17	地 震	阪神淡路大震災（M 7.3）	
2000（平成 12）	10. 6	地 震	鳥取県西部地震（M 7.3）	総社市で震度 4
2001（平成 13）	3.24	地 震	芸予地震（M 5.5）	総社市で震度 3

（注）○数値、日時などは、手元にある資料をもとに作成したもの。そのため、他の資料と比較した場合に数値等が異なる場合がある。
○同じ災害でも数値等が異なるものは、多い数値を記述した。

(総社市域以外の高梁川流域の災害の年表)

上房郡史から抜粋した災害の年表

西 暦	月	災 害 の 内 容
567		大水あり，民飢える。
601	5月	大雨
623		長雨のため大水あり 五穀登らず。
636	5月	長雨大水あり。
680	8月	大雨あり
691 (朱鳥 5)	4月～6月	雨降り大水あり
914 (延喜 14)	6月	洪水あり
916 (延喜 16)		洪水あり
918 (延喜 18)	8月	また洪水あり
929 (延長 7)	7月	洪水あり
948 (天曆 2)		秋大雨あり
962 (応和 2)	5月	長雨のため大水あり
1134 (長承 3)		洪水あり
1151 (仁平元)	7月	大水
1175 (安元元)	6月	長雨のため洪水
1627 (寛永 4)		大水
1655 (明暦元)		洪水あり 高梁町にては満水 1 丈 5 尺 (約 4.5 m)
1729 (享保 14)	8月 9 日	松山洪水あり 損害甚だしい
	9 月	中津井村洪水にて 7 日晚より降雨益々はげしく。14 日の朝より大雨となり，晩刻洪水となる。所々の堤防が決壊し，人家に侵入し字町は流失が最も甚だしかった。
1730 (享保 15)	8月 20 日	松山洪水あり 損害甚だし

西 暦	月	災 害 の 内 容
1772 (安永元)	8 月	大雨農作物を害す
1823 (文政 6)		大水あり
1836 (天保 7)		5 月より長雨続き、7、8 月洪水となり
1850 (嘉永 3)	6 月 3 日	中井村湛水にて西方川氾濫し、定光寺奥 80 箇所、山崩れ 流失家屋 21 軒 板倉藩主から救助米
1880 (明治 13)	7 月 1 日	高梁川大洪水 上房郡：罹災戸数 598、流失家屋 19、全壊家屋 2、床上浸水 304、床下浸水 244
	7 月 28 日	秋の長雨で洪水 松山町新町鉄砲町の裏には堤防がなく、かつ出水が夜中であつたため逃げ道を失い溺死する者多し
1886 (明治 19)	9 月 11 日	大洪水被害多し
1893 (明治 26)	10 月 14 日	高梁川大洪水 上房郡：死者 3 人、負傷 9 人、流失家屋 131、床上浸水 406、床下浸水 968

その他の郡史から抜粋した災害の年表

西 暦	月	災 害 の 内 容
1673 (延宝元)	5 月 15 日	西大川, 西原天神切巻倒巻 (連島町史)
1689 (元禄 2)	7 月 12 日	西阿知東光寺破堤 (連島町史), 水江村の堤防決壊 (船穂町史)
1707 (宝永 4)	8 月 19 日	8 月 19 日, 9 月 12 日に備前備中洪水あり (中洲町誌)
1708 (宝永 5)	6 月 22 日	大風と洪水あり (中洲町誌)
1717 (享保 2)	8 月 6 日	大風雨洪水 (船穂町誌)
1721 (享保 6)	7 月 11 日	備中大洪水 流失 280 余軒, 損壊 900 余軒, 死者 43 人 (中洲町誌)
	8 月 4 日	船尾村堤防決壊のため人畜死傷多数 (船穂町誌)
1748 (延享 3)	5 月 15 日	前代未聞の大水 (阿哲郡誌)
1755 (宝暦 5)		十二貫埋川破堤する (連島町史)
1763 (宝暦 13)	6 月 8 日	上十二貫埋川破堤する (連島町史)
1781 (天明元)	5 月 21 日	延享 (1746 年) に等しき大洪水あり (阿哲郡誌)
1785 (天明 5)	7 月 12 日	西大川巻倒大橋川水除堤破る。宮ノ浦水門流失 (連島町史)
1789 (寛政元)	6月17,18日	中新田切れ人畜死傷す (船穂町誌) 大雨によって高梁川堤防が決壊 河水が勇崎, 阿賀崎の村境にある元浜横土手を流れて勇崎村におしよせる。1 尺 5 寸 (約 4.5 m) 浸水し, 蔵の塩は流失した。
	8 月 12 日	西川, 左岸天神巻倒破堤, 川内, 玉島, 西ノ浦全域浸水 (連島町史)
1792 (寛政 4)	7 月 26 日	大風雨, 沿岸田地の流失 (阿哲郡誌)
1794 (寛政 6)		高梁川氾濫, 酒津ハヶ郷用水破損し万寿村水害あり (中洲町誌)
1808 (文化 5)	5 月 29 日	三日に亘る大雨で沿岸の被害多し (阿哲郡誌)
1809 (文化 6)		柳井原村幸田堤防決壊す (船穂町史)
1819 (文政 2)	5 月 23 日	二日間の大雨洪水, 諸川井堰多く流失 (阿哲郡誌)
1820 (文政 3)	6 月 15 日	三日間の大降雨, 堤防決壊井堰多く流失す (阿哲郡誌)

西 暦	月	災 害 の 内 容
1822 (文政 5)	8 月 8 日	大風大雨 近年稀有の洪水、破損多く、7 日の夜の大風で樹木の倒壊多し (阿哲郡誌)
1826 (文政 9)		船尾村上ノ原堤防決壊す (船穂町誌)
1850 (嘉永 3)	6 月 3 日	高梁川氾濫、安江及び四十瀬の堤防決壊し、その水が茶屋町まで及び床上浸水 5 尺 (約 1.5 m)。農作皆無となる。(都窪郡誌)
1852 (嘉永 5)	8 月 23 日	大風高潮、和田破堤、鶴新田弘化破堤 (連島町史)
1853 (嘉永 6)	8 月 4 日	米屋開破堤 (連島町史)
1868 (明治元)	5 月 18 日	高梁川洪水 (岡田村誌)
1869 (明治 2)	6 月 3 日	5 月 26 日より大雨続き 6 月 3 日に高梁川が氾濫し大洪水となる。 この大水は嘉永 3 年 (1850 年) の浸水より 7、8 寸 (約 20cm) 高く、この浸水は早島、茶屋町にも及んだ。(中洲町誌)
1880 (明治 13)	7 月 1 日	高梁川洪水 (都窪郡誌) 小田郡：罹災戸数 801、流失家屋 2、全壊家屋 2、床上浸水 757、床下浸水 30 賀陽郡：罹災戸数 1155、流失家屋 32、全壊家屋 10、床上浸水 568、床下浸水 507
1881 (明治 14)	5 月 6 日	三日に亘る大雨で大洪水。前年破損し復旧した箇所が再び破損。新見にて水位 7、8 尺 (約 2.4 m) になる。(阿哲郡誌)
1892 (明治 25)	9 月 25 日	暴風雨にて高梁川は前代未聞の大洪水となる。 井倉付近の水位は 2 丈 (約 6 m) になる。(阿哲郡誌)
1893 (明治 26)	10 月 14 日	高梁川大洪水 (岡山県水害史) 小田郡：死者 11 人、負傷 63 人、流失家屋 177、床上浸水 328、床下浸水 1223 賀陽郡：死者 7 人、負傷 2 人、流失家屋 288、床上浸水 176、床下浸水 2353 川上郡：死者 49 人、負傷 10 人、流失家屋 360、床上浸水 426、床下浸水 460
1899 (明治 32)	7 月 10 日	7 月 8 日から降り続く雨で県下三大河川は増水。河内村と連島村との境界の堤防が決壊。河内村、中洲村、北面新田、宮ノ浦、鶴新田、西之浦が浸水

(岡山県通史に見る災害の歴史)

昭和 5 年に岡山県が岡山県通史という岡山の歴史の本を発行した。その中で災害についての記述は、巻末の年表の中に僅かに見られる。その地域を見ると美作国ばかりであり、江戸時代岡山では津山藩のみが災害を公式な記録として残していたと推測できる。

年表より抜粋したものを記す。

岡山県通史から抜粋した岡山の災害の歴史（昭和5年 岡山県発刊）

西 暦	月	災 害 の 内 容
1607	9 月	美作洪水（成覚寺縁記）
1612	9 月 2 日	美作洪水 人畜多く死す。（富代記）
1617		英田川大水（青野村明細帳、石川家記）
1621		津山川大水（森記録、作陽誌）
1654	7 月 19 日	早魃（ばつ）に次ぐ洪水をもってし旭川あふれだす。（備前略史、美作略史、森記録）
1673		美作国洪水（郷村沿革絵図）
1710	8 月	美作大震 人畜多く死す。（松平記録）
1721	8 月	美作大風洪水（松平記録、風水届書）
1724	9 月	美作大風洪水（風水届書）
1731	8 月	美作大風洪水（松平記録、風水届書）
1739	8 月	美作大風洪水（松平記録、風水届書）
1769	6 月 8 日	美作洪水（風水届書）
1773	夏	諸国洪水
1786	6 月 16 日	関東大水 開府以来未聞と伝わる。
	8 月 29 日	美作洪水（風水届書）
1795	8 月 29 日	美作洪水（風水届書）、津山市街及び倉敷村水に浸さる。
1808	6 月 29 日	美作加茂川洪水（水害届書）
1838	7 月 21 日	美作、香々美川洪水（水害届書）
	8 月 10 日	美作 又洪水 沿岸大に崩れる。
1852	8 月 22 日	美作洪水 津山川 市街の大半が水に浸される。
1854	11 月 5 日	美作 地震（矢吹日記）
1871	5 月 18 日	美作洪水 津山川氾濫 市街の大半が水に浸される

(岡山県下の 1946 年南海地震、1972 年・1976 年台風被害)

岡山県で戦後起こった災害の記録はよく残っており、そのうち大きな被害のあった 1946 年南海地震と 1972 年台風被害、1976 年台風被害を記す。

1946 年南海地震被害報道

昭和 21 年 12 月 21 日 地震調査記録：地震被害調査（岡山県下） 岡山測候所

地 域	市町村	死 者	負傷者	家屋全壊	家屋半壊	家屋小破
備 前 市	片 上 町			1		
	伊 部 町		2	1	10	
瀬戸内市	今 城 村				1	
	笠 加 村					1
	福 田 村					1
岡 山 市	光 政 村	8	65	146	188	260
	幸 島 村	6	1	69	199	63
	津 田 村	4	4	155	347	536
	九 蟠 村	2	19	24	129	
	豊 村		1	28	73	399
	西大寺町	5	6	11	24	
	金 田 村			7	7	66
	玉 井 村			1	5	
	朝 日 村				3	
	御 休 村					1
	雄 神 村					1
	可 知 村			4	1	

地 域	市 町 村	死 者	負傷者	家屋全壊	家屋半壊	家屋小破
岡 山 市	岡 山 市			7	15	110
	福 島*	5	6	90	84	75
	興 除 村	2	10	200	100	
	藤 田 村	2	5	30	50	
	沖 田 村	4	7	223	321	
	操 陽 村		3	31	372	
	三 蟠 村	7	2	42	26	
	一 宮 村			5	2	24
	白 石 村			4	40	
	大 野 村			4	1	30
	今 村	1	1	8	7	
	妹 尾 町		2	3	9	
	吉 備 町			5		
	福 田 村			10	2	
	灘 崎 町	1	2	10	50	100
	甲 浦 村	1	5	6	17	50
	小 串 村			4	7	35

1972 年台風被害

(岡山県警本部調べ)

	警察署別 被害種別	岡山東	岡山西	岡山南	西大寺	御津	瀬戸	備前	牛窓	玉野	児島	倉敷	玉島	笠岡	矢掛	井原	総社	高梁	新見	勝山	津山	勝英	加美	計
人的被害	死者（人）		2										1		5			2	2		2			14
	負傷者（人）					2		1							5	2	2	4			1			17
	行方不明（人）																						1	1
建物被害	全壊（棟）					1									1	3	1	51	14	2	1	4	6	84
	半壊（棟）						1	2		1				1	2	3	1	20	16	3		2	1	53
	流出（棟）															3		15	3	1				22
	床上浸水（棟）	78	63		3	315	65	180						25	95	101	61	1,066	536	31	50	56	206	2,931
	床下浸水（棟）	588	463		43	772	733	90	5		18	4		120	280	204	64	4,543	2,946	722	875	152	252	12,874
	一部破壊（棟）	1			1	5				1	1				2	3	5	54	12			3		88
	非住家被害（棟）		1			5									1	4	4	31	13	2		1	2	64
耕地被害	水田流失埋没（ha）						5												66					71
	水田冠水（ha）	135	130		122	429	718	194	695			7		100	199	185	193	335	248	13	19	305		4,027
土木被害	道路損壊（カ所）	3	9	1	3	29	11		2	1		5	2		9	16	30	55	283	7	15	21	7	509
	橋梁流出（カ所）				1	9	4		1								2	13	82	1	6			119
	堤防決壊（カ所）		3		1	1	2	1									1	1	1				1	12
	山（がけ）くずれ（カ所）	2	2		3	12	20	1	2	2	1			1	3	19	4	6	103	3	4	10	6	204
	鉄軌道被害（カ所）					1	1											1	4				1	8

注：岡山県は、9月10日、岡山県災害対策本部を設置するとともに、3市(岡山・備前・笠岡)11町(日生・吉永・和気・美作・長船・邑久・牛窓・矢掛・作東・真備・熊山)に災害救助法を適用した。

1976 年台風被害

(岡山県警本部調べ：昭和 51 年 9 月 30 日)

		署	岡山東	岡山西	岡山南	西大寺	御津	瀬戸	備前	牛窓	玉野	児島	倉敷	水島	玉島	笠岡	矢掛	井原	総社	高梁	新見	勝山	津山	勝英	久米南	計
人的被害	死者	人	1					1	6							6				2	1	1				18
	行方不明	人																								
	負傷者	人		1	1	1		3	37	7	1	4			5	18	3		2	3			1	6		93
建物被害	全壊	棟		1		6		1	62	23	1	1			3	30	5	2						2	1	138
	半壊	棟				1	1	2	80	101		2	1		4	32	1	1	7						1	234
	流出	棟							14																	14
	全焼	棟																								
	半焼	棟																								
	床上浸水	棟	101	113	263	2,019		134	1,528	1,250			1	1	11	131	390	2	102				4	271		6,321
	床下浸水	棟	1,027	2,325	3,947	5,884		1,013	3,742	3,931	33	55	511	32	481	1,128	171	47	572	55	1	2	115	1,626	27	26,725
	一部破壊	棟				7	1		428	341	2	8			2	84	12		21	5			7			918
	非住家被害	棟		3	47	4	3		7	58		2			2	22	3	2	1	6			1	3	5	169
	水田・流失・埋没	ha				2		8	42	130							2		1					56		241
耕地被害	冠水	ha		479	522	2,861		536	663	1,739	300	30	25			302	182	5	952		4			600		9,200
	水田・流失・埋没	ha				15			3	124						14								55		211
	冠水	ha		6	8	263		21	211	122							11		18	22				50		732
道路・橋・堤防・山・鉄軌道・通信施設・木材・山林・船舶被害	道路損壊	箇所	1	21	15	76	14	147	117	474	3	20	6		7	6	176	14	371		13	2	25	43	2	1,553
	橋梁流出	箇所		1				5	33	16					1	1	2		3				2		1	65
	堤防決壊	箇所				11		5	83	131		1			2	5	50		2	1				1		292
	山(崖)くずれ	箇所		19	8	65	1	35	90	312	3	30	4		12	431	50		64		1	2	11	5	2	1,145
	鉄軌道被害	箇所							4							1					1			1		7
	通信施設被害	回線	300	228	200	261	43	70	640	350	124	92	300	149	113	207		211	91	395	52	137	336	90		4,389
	木材流失	m³																								
	山林流失	ha																								
	沈没	隻							4																	4
	流失	隻							4																	4
船舶被害	破損	隻																								
	ろかい等による舟	隻							4																	4
り災世帯数		数	101	114	263	1,666	1	92	1,691	1,154	1	3	2	1	20	164	396	5	119				4	273	2	6,072
り災者数		数	397	410	999	5,817	1	327	5,952	4,124	3	10	11	5	77	610	1,420	18	477	5	1	1	16	930	5	21,616

第3章 防災を科学する

(東日本大震災を考える)

2011年3月11日、私はテレビに映った光景に目を疑った。夜、空中から映し出された地上は炎に包まれ、それが延々と続いていた。2～3万人の人が亡くなったと感じた。しかし、これが午後4時頃でなく、深夜起こっていれば、犠牲者は倍の数になっていたと思う。東北では過去何度も津波に襲われていて、住民の防災意識も高く、防潮堤の築堤も進んでいたのに、多くの死者、行方不明者が出た。もしこのような津波が東日本に起こらず、東海から九州にかけて起こっていれば、しかも深夜から明け方にかけて起こっていれば、人口規模や防災意識の低さを考えると、百万人規模の死者、行方不明者が出たのではないかと思った。

3月11日を境に、津波に対する日本人の見方は変わってきたと思う。しかし、1993年の北海道南西沖地震や2004年のスマトラ島沖地震によって、津波の恐ろしさは、起こった時は皆知っていたはずである。何年かすると忘れ去られていただけの事である。科学がここまで進歩し、あらゆる情報が手に入る時代にあって、それから起こった福島原発の事故は、津波が来ただけで日本史上に残る大惨事となった。3月11日以降いろんな人が過去起こった津波についても調べるようになり、報道によって今回のような津波が過去にも起こっていたのを我々はここ1年で知ってきた。

私は、江戸時代の方が津波に対する防災意識が高かったのではないかと考える。漁師町では、家は高台に建てていたし、地方では庄屋や名主が過去の津波の被害を記録していて、住民の避難を誘導していた。日本は明治維新で、それ以前の災害の歴史を何かと一緒に忘れ去り、第2次大戦の敗戦で再びそれ以前の災害の歴史を忘れ去ったのではないかと思う。今後起こるであろう津波については、地震学者だけでなく、地質学者、歴史学者も加わり、人工衛星やスーパーコンピューター等を使って様々なケースに対応出来る防災システムを作っていくべきである。満潮の時とか、湾の入り込み方とか、何度も津波が来た場合とか（1854年南海地震では、大阪に3回以上の大津波が長時間にわたって来ている）、台風と重なった時とか、色々なケースでどの地域にどの程度の津波が来るのか、想定すべきである。

特に深夜津波が起こった時の対応を考えておくべきである。津波を監視する人工衛星を打ち上げたり、必要があれば自衛隊が出動して沿岸に警告できるようにしていくべきであろう。又、災害の情報を得る為にラジオをあらかじめ用意する事も考えておかななくてはならない。その他、携帯電話のカメラのライト機能が懐中電灯がわりになる事を知っておけば役に立つと思う。

東日本大震災では、中学生が小学生を誘導して津波の被害から免れたり、近所の高齢で足の不自由な人を先ず逃したりと様々な美談報道を目にした。その中で中国のインターネット上で女川町の佐藤水産で働いていた 20 人の中国人実習生を専務の佐藤充さんが避難誘導して助け、専務は行方不明となっていると伝え、中国全土で話題になっている事を目にした。佐藤充さんは後に遺体で見つかったが、女川町は人口 1 万人の町で、1,000 人以上が死亡、行方不明となったが、十数社の水産会社にいた 160 人の中国人実習生は全員が無事だった。これ以降、中国の若者の日本に対する好感度がアップしたと思う。

今回の震災で、最も早く救助を申し入れた国はトルコである。1985 年のイラン・イラク戦争の時も戦争状態の中 215 名の日本人全員をトルコが救援機を出して救出した。これは、1890 年にトルコの船が和歌山沖で遭難した時、台風の中住民が決死の救出をし、69 名を救助した事による。今だにトルコ国民が一番好きな国は日本であり、120 年間続いているという事である。言葉のわからない外国人は災害に対して弱者であるので、まずそういう人から救うという日本人のすばらしさを実感した。

(岡山県知事への働きかけ)

東日本大震災が起こった月の 3 月末に、石井岡山県知事と岡山県下の各商工会議所会頭との懇談会有り、その席上、私とその 2 年前に書いた津波の文章を渡し説明した。その数日後、私は知事室を訪れ、私の調べた資料と備前県民局が以前作成した南海地震に関する冊子について説明した。その時私は知事に、地震による津波の被害が無いと思われる岡山県が国の防災計画の見直しを要望することによって、太平洋沿岸の自治体がもっと危機意識を持つようになれば良いですね、と話した。知事は 4 月初めさっそく防災の検討委員会を作り、5 月には内閣府を訪れ、国に「東海・東南海・南海 3 連動地震の被害想定や対策を示すよう」要望し、その事が報道された。知事に会った時、「備前県民局が作った資料を 2 部持っているのでは 1 部差し上げましょうか」と言ったところ「県が持っていると思うのでよろしい」と言われたが、後で聞いた話では、県のどこにもその資料は残ってなく、作成した人が聞かれたので渡したという事であった。

当時、経済同友会の委員会でも配っていたが、試しに聞いてみるとほとんどの人がもう廃棄していた。今考えるに、今作っているこの資料も 2～3 年するとみんな捨てられて、忘れられてしまうのかと思うと、少し淋しくなる。

さて、岡山県は 4 連動地震による津波の浸水影響範囲を広げ、津波の高さも従来の最高 3m から最高 6m と 2 倍で再計算し公表した。

翌年、2012 年 3 月再び、石井知事と県下商工会議所会頭との懇談会有り、その席で私は次のような提言をした。

【提言】津波発生時に備えての広域連携

(一例として) 地震発生から岡山県に津波が到達する2時間までの間に倉敷から総社へ道路を一方通行にし、総社市内の学校等へ車を誘導する。その為に自治体、警察、消防、学校、交通機関等があらかじめ役割を決め対応できる態勢をつくる。
(広域連携) 県が主導して津波発生時に一人でも多くの命を救えるよう各地域で上記のような広域連携の態勢をつくる。

ただし、1993年の北海道南西沖地震では地震が近くで起きたので、地震発生からわずか5分後に奥尻島へ津波が押し寄せ、30分は大丈夫だろうと思って車で逃げようとした人が被害に遭った。太平洋岸では住む所により避難の方法をよく考えておく必要があると思う。

(山陽新聞への働きかけ)

東日本大震災があった翌月、山陽新聞社に私が2年前に書いた紙や津波に関する資料そして岡山県備前県民局の作成した冊子を持って行き、東海～日向灘連動地震による津波の警鐘を鳴らしてほしいとお願いした。

3ヵ月後新聞には、大きな見出しで「5m津波なかった？」と載っていた。1954年南海地震で秋岡惣五郎が児島郡で1丈5.6尺(4.5～4.8m)津波が来たというのは過去の解説の誤りではないか？というものである。(P5に秋岡家の文章を掲載してある)論点は三つある。

第一は、津波の規模の割には、岡山県に被害記録がほとんど無い。

第二は、朔日「十二月」よりは朔日「志ほ」よりの誤りではないか？

第三は、「その他海岸大損の由 児島郡にて朔日十二月より1丈5.6尺高く来りと後日承り候」という文章は後で書き加えた文章である事はわかっているが、直前に大阪や伊勢の津波被害を示す文語があることなどから、大阪などの他地域の津波の規模を、児島郡で後日聞いたという意味ではないか、というものである。

まず第一の岡山県に津波被害の記録がほとんど無いというのは、花房家の文書に「海辺は大津波上がり所に寄り人家とも引き退き申し由」の後に各地の被害状況が書かれてある。岡山市西大寺地区周辺に言い伝えが残っていないか調べることが出来ればと思う。そして大阪では被害を伝える瓦版が公開されるまで、たいした被害は無かったと信じられていた。

二番目は、「朔日十二月」なら「初日十二月」であろうが「朔日志ほ」だと「一年で最も潮の高い大潮の日」という意味になり、大潮より1丈5.6尺高く来たという意味になり、最も高い満潮より4.5～4.8m来たとなり、たいして問題にならない。

問題は、三番目である。まず「その他海岸大損の由」という文章は、海岸は大きく破壊されたという意味で「郡々破損所寄目録」によると、備前藩の内、城下町岡山以外の村々の被害で海岸堤防破損は、2,642mとあり、児島も海岸堤防破損はあったかもしれない。長尾氏の本によると、大阪の記録では夜何度も長時間にわたって津波が襲ってきていて、満潮と重なった可能性が高いとある。岡山でも同じように何度も津波がきており、しかも夜だったので津波の高さを見ることは難しかったのではないかと考える。そして児島と坂出は瀬戸大橋がかかっていることを見てもわかるように海の幅が狭い。又東から来た津波と西から来た津波が重なった所かもしれないし、児島の海岸は入り組んで切り上がった場所がある、など考えると津波が高くなる可能性もある。「5m津波はなかった？」のむしろ？に私は力点を置き、この文が児島の事を示している可能性もあると思い、今後も秋山家の文章は研究すべきだと思う。ちなみに岡山と大阪の最高津波高を推計する方法の1つに、1946年南海地震による岡山での津波最高が0.9mだったので、この時の大阪での津波最高が何mだったかわかれば岡山と大阪の比率が計算でき、大阪の最高津波高がわかれば岡山の最高津波高もわかるはずだ。

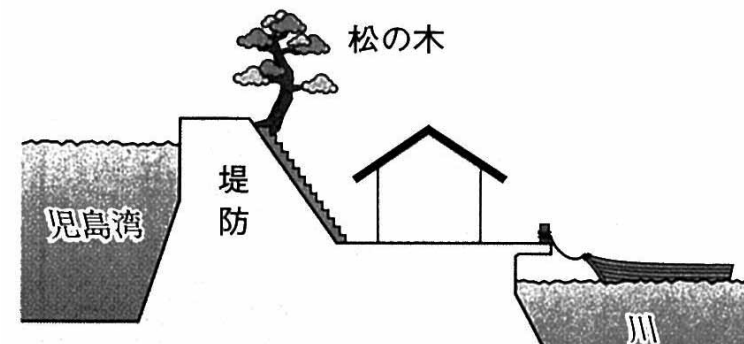
(昭和南海地震)

1946年発生した南海地震は、M 8.0で全国での死者は1,330人で岡山県では52人で4%を占める。意外と岡山県での被害が多く、岡山市が震度6で死者48人と殆どを占める。津波の最高は岡山市9幡港で0.9mで、津波による死者は無く、地震による被害である。来る4連動地震は、M 9.1の予想であり1946年南海地震の50倍の規模であり、建物の崩壊、液状化にも十分対処する必要がある。特に岡山市南部は揺れに対する訓練をすべきであると思う。

山陽新聞は、「昭和南海地震の証言者たち」と題したシリーズを2012年6月7日から掲載しているが、今原稿を書いている3日前の2012年6月8日に、辻数馬さんの話が載っていた。辻さんが家の前の堤防に上がって見ると通常なら干潮で10cmしかないはずの水位が50cmになっていた。当時の堤防は低かったから、満潮時だったら越えて被害に遭っていたと思うと載っていた。

新聞社が過去の南海地震の影響を知る人の話を記録していく事は、今後の地震に対する防災を考える上で重要な事だと思う。

当時の辻さん方 周辺のイメージ



(内閣府検討委員会の発表)

2012年3月31日、内閣府検討委員会は、次に来る東海～日向灘4連動地震をM9.1と予想した。満潮位を考慮した最大津波高を、太平洋側では概ね20m以上とし、高知県では、34mとした。いずれも2003年の予想に比べ倍にした。しかし、瀬戸内側である岡山県は3.4mを3.7mに、大阪府は3.2mを4.0mに上げただけで、広島県に至っては、4.0mを3.6mに下げた。これには私は不満が残る。

さて2012年3月1日に発表した四国地方整備局の津波高想定では、「瀬戸内は1m以下」と大きく見出しが出て、同局独自の津波シミュレーション結果では、地形により更に高くなる可能性があるが、瀬戸内沿岸で高さ最大0.5～1m、高知県で高さ最大11～12mとする結果が発表された。その記事を見て、私は「違う、おかしい?」とつぶやいた。津波高最高をだすなら、過去の記録を参考に最悪の場合を想定すべきだと考える。

(中央構造線)

中央構造線は、茨城県から大阪、四国北部を経て大分、鹿児島へ続く日本列島最大の断層である。

1596年9月1日、慶長豊後地震(M7.0～7.8)が発生した。その地震で別府湾の二つの島が消滅したと伝わっており、大津波が発生したと古文書にある。別府湾の地震による津波の影響が岡山にあるのか検証すべきである。

又同年9月4日に伊予地震(M7.0)が発生した。その後どちらも過去400年間地震が発生しておらず、相当エネルギーがたまっている可能性がある。特に伊方原発は中央構造線に近接していて、豊後地震による津波と直下型の伊予地震に耐える構造にする必要があると考える。

(海洋資源国日本)

夏は暑く冬寒い。そして地震に津波、火山の噴火と日本はとかく災害の多い国である。台風なんかは、時にはゴジラが日本列島を縦断したような被害をもたらす。しかし日本人の勤勉さは古代より日本人が孔子の論語を学んで来た事と、このような厳しい自然と共に生きてきたからであると思う。

大津波を起こす巨大地震は、プレートが沈み込む事により起こるが、沈み込む所にある熱水鉱床はレアメタルの宝庫であり、将来日本は資源大国となるだろう。

つい数日前、新聞の記事で西岡名誉教授が、巨大な船から海底に向け配管を伸ばし、海を巨大なダムに見立て水力発電をするシステム「ネプチューン」を発案したと載っていた。原発一基の10分の1で建設出来るネプチューン一基で10億キロワットの発電出力が見込まれ、原発千基分となる。数年前日本の科学者がシロアリの体内にいる微生物を使い、草や木材を効率良くアルコールに変える技術を発案したと報道された。これに限らず、日本の科学者はエネルギー生成に関して様々な新しいアイデア、技術を発案している。国はこの様な発案を具現化するよう、もっと予算をつけていくべきだと考える。

(大津波以外の4つの危機)

1つ目の危機—2009年7月に日本のトカラ列島付近の海上から皆既日食が見られた。その時、太陽の黒点の活動が小さかった事が専門家の間で話題になった。太陽は11年周期で活動が大きくなったり、小さくなったりしていて、2009年は活動が大きくなっていない年ではない年である。過去2000年を見ると、約350年毎に太陽の活動が弱まって、活動の周期が11年から12年になるとその後活動は弱まり小氷河期が訪れていることが歴史や木の年輪からわかってきている。前回の小氷河期は、1645年から1715年まで続き、イギリスのテムズ川が凍ったという記録があり、日本では飢饉が続いた。最新の研究データによると、太陽はここ20年間活動が低下し続けているという報告もある。広島大学の長沼毅准教授によると、今地球は氷河期にあたり、過去45万年を見ると、10万年の氷期と1万年の間氷期をくり返している。そして、今は間氷期になって1万年以上が経ち、いつ氷期がきてもおかしくないという説を唱えている。どちらにしてもそうなる食糧不足の問題が起こるので、今から食糧の生産方法を全く変えるという事も考えていかねばならないと思う。たとえば大きなタンクで作ることの出来る藻を主食に変えるような方法もある。

2つ目の危機—地球環境を守る為、CO₂の排出を減らそうとする運動が叫ばれて久しい。CO₂の排出が地球温暖化の原因と見られている事によるが、前述べた小氷河期がもし来れば、CO₂を減らそうという運動が意味が無いという考えが出てくるかもしれない。ここでCO₂が増加すると地球がどうなると考えられているのかお話する。CO₂が増えれば地球が温暖化し、南極と北極の氷が溶けてしまい、海の温度差が無くなる。そうすると海流の流れが止まってしまう、地球は氷期になる、というのが1つの理論である。CO₂の増加と地球温暖化の関係がどうであれ、CO₂の急激な増加は、生物の生存にかかわると考えられる。アメリカの地質学者が以前、太平洋の海底の地質調査をし、2000万年前に生物の殆どが死滅したと発表していた。その原因は地球全体で活発な火山活動があり、大量のCO₂が

短期間に地上に放出された事にある。人類は産業革命以降、CO₂の排出を増加していき、この100年で2000万年前と同じ量のCO₂を排出している。これからもっとCO₂の排出が増えれば生物への影響は計り知れない。

3 つ目の危機—夜空を見るとオリオン座の星の一つにベテルギウスという星が輝く。この星は地球から640光年先にあり、640年程前超新星爆発をしていて、今年2012年か2013年に輝いて見えるといわれている。この星は満月の100倍の明るさで3カ月間輝き、徐々に見えなくなる。640光年というと宇宙の中ではとても近い所で、このように近い所で超新星爆発をするのは10万年に1回の確率である。昨年世界中の天文学者が、このベテルギウスの自転軸の角度が地球に対して何度かを計算していた。もしベテルギウスの自転軸の角度が地球に向かって2℃以内なら、地球はガンマ線バーストによって致命的な被害を受けるからだ。地層から地球は超新星爆発によるガンマ線バーストによって4億4千万年前、当時生きていたサンヨウチュウの浅い海に生きていた分は死滅した事がわかっている。幸いベテルギウスの自転軸の角度は20℃だったので、地球には影響が無いと発表された。

しかし私は地球に影響があるかもしれないと思う。宇宙線は超新星爆発によって発生し、宇宙のあちらこちらから地球へ降り注ぐ。この宇宙線によって雲が作られるのだが、太陽の活動が低下すると磁力が弱まり、地球をおおっているバリアが弱まり、雲の粒が沢山出来すぎて大きな粒にならず、雨となって地上に下りにくくなり、雲が地球をおおって地球が寒冷化すると考えられている。そうすると、太陽活動の低下と超新星爆発による宇宙線の増加が重なると雲が地球を包い続け寒冷化する可能性があるのではないかと考える。他にこのように言っている人はいないだろうから3番目は危機でなく、単なる10万年に1回の天体ショーとなる事を祈る。

4 つ目の危機—日本では1975年には勤労世代7.2人でお年寄り1人を支えていた。これが2000年には、3.6人で1人を支えていて、2050年には1.2人で1人を支えるようになる。勤労世代はお年寄りだけでなく子供も、教育も社会システムも全て支えていかなくてはならない。この危機を乗り越えるには人づくりに尽きる。

ところが、近年子供の学力レベルは、以前は世界のトップレベルであったが、低下の一途をたどっている。その原因の一つに、私は使って良い漢字や読み方が年々増えている事も原因の一つではないかと考える。

私は、総社市の教育委員を13年程しており、教育委員長も7年したが、子供を表彰する時、ふりがなをつけていないと読めない子供の名前が急増している。これは名前に使ってもよい文字や読み方が毎年増えて、それを親が付けていくことによる。

中国を訪れてまず驚くのが看板に書かれた文字が略字でこれは毛沢東が奨励したものである。毛沢東は戦後の日本の繁栄の原因の一つに使える漢字を減らしたからだと考えていたのかもしれない。そして中国では子供が最初に習う文字はアルファベットだと聞いた。中国の唐が滅びたのは、官吏の試験を難しくするために漢字を増やし、数学や常識を覚える余裕がなくなって、官吏の質が落ちたのも原因の一つである。そこで日本では常用漢字を減らし、子供の名前にもアルファベットが使えるようにすれば、子供の学力はアップし、国際化も進むと思う。

国のシステムについて言えば、先進国の殆どが導入している国民に統一した番号をつけ、社会保障と納税の一体化を図るべきである。そうする事で行政の効率化を計る事ができ、税の無駄使いが減る。

他にも日本人が世界中の常識だと思われる事が日本だけか、もしくは数か国でしか通用しない制度がある。その一つは「バッヂ」をつける事である。明治維新で日本は西欧からいろんなものを取り入れた。イギリスからは議会制度と貴族制度、ドイツからは軍の制度、アメリカからは経済の制度、そしてフランスからはバッヂをつける制度である。フランスはフランス革命で貴族制度が廃止された後、勲章すなわちバッヂで身分を表そうとした。日本人が外国へ行った時、フランス、韓国以外の国では、バッヂをしているとカルトや特殊な集団に属していると思われることがある。

その他、昭和とか平成といった元号は今では日本だけでしか使われていない。元号は2100年前に中国の漢の武帝が皇帝が暦まで支配している事を誇示する為に作ったものである。昭和や大正の年が西暦何年だったか悩んだ経験を多くの方がお持ちだと思う。外国人にとっては複雑さは想像以上である。ただ、元号が変わって1桁の時は気分が一新されて良いが、公的機関では基本的には西暦を使った方が良いと思う。

戸籍制度についても、あるのは日本と日本がかつて統治した事のある台湾と韓国だけであり、国籍があれば必要ないように思われる。国際化を進め、国のシステムを簡素化し国民の生活水準を維持していく為には「大きな改革」が必要だと考える。

(終わりに)

最初に戻るが、津波から逃れるには一刻も早く逃げる事である。そして予想以上に津波が早く来たり、大きかったりした時の為に浮輪代わりのペットボトル大を2個（自分ともう一人救う為）持つ事をおすすめする。

(参考資料)

山陽新聞(夕刊) 2008年(平成20年)12月3日 水曜日

一日一題 なんでも鑑定団 in 総社

総社商工会議所会頭

清水 男

昨年、総社市でテレビの「出張なんでも鑑定団」の公開収録があり、私はわが家に伝わる天正十(一五八二)年の年号入りの古備前の大甕で出演した。天正十年は秀吉の備中高松城水攻めのあった年で、私は備中高松城主清水宗治と兄の備後の守宗知の直系に当たり、わが家より清水宗治を輩出している。

収録当日、担当ディレクターからは簡単な説明があっただけで、リハーサルもなく出演順も知らされず、呼ばれたらステージに上がるという具合で、鑑定士にも鑑定品を事前に見せることなく、その場で初めて見せることを聞かされた。このような緊張感が、「なんでも鑑定団」という番組が高視聴率であり続ける秘けつであると思った。

私の古備前の鑑定は中島誠之助氏があたり、まず握手を求められ、「備中高松



◇筆者紹介(しみず・だん)ブライダル三松社長。米国チャプマン大学院修了、MBA取得。2004年から総社商工会議所会頭。総社市教育委員長。総社市出身。56歳。同市総社。

城水攻めで清水宗治は城に立てこもった五千人の命を救うため、毛利と織田の講和のため切腹し、その時ほかにも八名が自害した。そのご子孫に会えて光栄です」と話され、その博学に驚かされた。

放映の画面では、伝世品としては唯一のわが家に伝わる宗治と八将の肖像画が紹介され、大甕の鑑定結果は、百万円と言った私の予想に対し三百五十万円と高い評価を受け、備中を代表するお宝であると絶賛された。

中島誠之助氏の鑑定を間近で見ても、一流の鑑定士とは物が見えるだけではなく、諸学に通じていて、しかも人生哲学をちゃんと持っている人なんだと思った。

山陽新聞(夕刊) 2008年(平成20年)12月10日 水曜日

一日一題 販売士一級

総社商工会議所会頭

清水 男

販売士資格は流通業界唯一の公的資格で三級、二級、一級とあり、全国の年間合格者は三級が約二万人、二級が約一万入だが、一級は約百人である。

五年前、私はその試験に挑戦し、一年以内ですべての級に合格し、山陽新聞倉敷・総社圏版に大きく載った。一級は特に難しく、試験の半分以上が記述問題で、二級試験から三カ月後の試験であり、一気に

大学院と大学受験の時期であったため、範を示そうと思ったからである。

MBAの取得は、私が二十歳の時、父・清水丈(総社商工会議所初代会頭)が急逝したため、父の事業を手放し、大学卒業後に渡米。二年以上かかることを前期オールAで特別に一年で取得したという経緯がある。

勉強するにあたり心構えとして、五十歳を超えると人にたずねるのが恥と思うのが失敗の元凶だと言われていたので、わからないことは小学生にでも聞くことにした。そして眠らず勉強する。

すべて取得した例は全国でまれである。

私は、ブライダル三松と式場案内ダン、ジュエルダンの社長をしており、総社商工会議所副会頭(当時)や総社市教育委員長のほか、数々の団体の長を務め多忙を極めていた。その中で販売士の試験を受けようと思ったのは、MBA(経営学修士)取得以来三十年ぶりに勉強しようと思ったとき出合ったのが、販売士三級のテキストであったことと、子供二人が

次に、米国での生活を思い出すと、当時アメリカ人はテレビをあまり見ないし、新聞も週一回配達されるだけだった。二カ月間テレビを一秒も見ず、新聞も一切読まず、学習内容をボイスレコーダーに吹き込み、車の運転でも、どこでも常に聞いていた。一念発起して勉強するなら、このくらいやらなきゃ、と思う。

サラ金・ヤミ金

昨年は岡山山大学院で脳科学とシヨッ
ピングセンター経営について講義をし
た。今年は総社小学校六年生に租税教室
の授業をし、どちらも学生や児童が熱心
に受講し、心のこもったリポートや感想
文をいただき感激した。
小六の授業では、税の歴史を弥生時代
から現代まで時代観を交えて教え、その
あと児童に計算機を持たせ、サラ金で五

総社商工会議所会頭

清水 男

十万円を20%の利子で借り続けると二十
年後にはいくらか計算させた。

答えは約二十万円である。児童は驚い
たが数年前までは上限金利は29%で、そ
の計算でいくと八千万円になる。

現在、消費者金融で借金をしている人
が千六百万人、そのうち一割の人が多重
債務者で、税金も払えない状態にある。
大人になったらできるだけお金を借りな
いようにしようね、と教えた。

二〇〇三年、大阪府八尾市に住む老
夫婦と妻の兄が線路上にうずくまり、
電車にはねられ即死した。妻の遺書に
は「毎晩毎晩電話におびえています」
などと記されていた。消費者金融に多
額の借金があり、ヤミ金融の誘いに乗
った主婦は一万五千円を借りたが、毎
週一万五千円の利子であった。その利
子の比率で借り続けると百日後に三億
円、一年後に七千万円（京は兆の上の
単位）になる。このヤミ金融組織のトッ
プは先月逮捕され、約五十億円を集め
たとされる。他の事件では、暴力団の
下部組織がヤミ金で一千億円を集めた
と報道された。

日本ではねずみ講、ヤミ金、そして
現在は振り込み詐欺と新たな犯罪が考
案され、被害が拡大してから立法措置
がなされるが、もっと早く対処してい
れば被害が少なくて済んだと思う。そ
の意味で政治家、マスコミの今後の果
たす役割は大きいと考える。

一日一題

向刺激社会

現代の技術革新のスピードは目を見張
るものがあり、特にIT（情報技術）の
進展により現代は情報化社会と言われて
いる。しかしこの半世紀を見ると、繁栄
とともに人は刺激を求め、それがどんど
んエスカレートして、私の造語だが、
現代は「向刺激社会（Rise Stimulus Society）」とも呼
べるのではないかと考える。

三十六年前に亡くなった私の父は大の

総社商工会議所会頭

清水 男

プロレスファンで、力道山と大変親しく、
結婚式にも招待されたほどで、五十年前
わが家に泊まったことがある。力道山が
民家に泊まることはほかには無かったと
聞いており、当時五歳の私が力道山のひ
ざの上に抱かれている写真が今でも残っ
ている。

その後、力道山と噛みつきブラッシー
の戦いがテレビで放映され、力道山が流
血したのを見た老人が二人ショック死し

たという記事が新聞に載っていた。当
時は白黒テレビしかなかったのに、で
ある。

現代の映画やドラマで首がとぶシー
ンがあっても、それを見てショック死
する人はいない。テレビを見れば、映
画やドラマの殺人や残虐シーンがま
ます増え、ニュースでも殺人事件や死
亡事故の報道が多く、すべての番組を
合わせれば、一日にいったい何人が死
んだら負傷しているのか。暴力、犯
罪はエスカレートする一方で、テロリ
ストの犯罪もジェット機で高層ビルに
突っ込むなど過激になっていて、その
うち原爆でも使いたくない状況になっ
ている。

アメリカでは暴力や残虐シーンの放
映が禁じられているが、日本では全く
規制が無いばかりか、さらにエスカレ
ートしている。

国民が刺激を求めている限り向刺激
社会は続くだろうが、どこかで規制を
しないと犯罪の凶悪化は止まらないと
思う。

一日一題

一日一題

東南海・南海地震

東南海・南海地震は、今後三十年以内に50〜70%の確率で発生すると国が予想している。その予測規模はM8・6で阪神・淡路大震災の約百倍の大きさになる。その地震は東南海地震と南海地震が連動して起こるものであり、百〜百五十年ごとに発生している。

岡山県備前県民局の資料によると、一八五四年にM8・4の南海地震が起きた時は、岡山県内で最高五層の津波が発生

総社商工会議所会頭

清水 男

した。次に起きる地震はその二倍の大きさで、それ以上の津波が岡山に来る可能性があり、地球温暖化による海面の上昇や、岡山県が他県に比べ干拓地が多いことを考えると、その被害が心配される。

昨年九月にニュースで、インドネシア・スマトラ島沖でM8・4の地震が発生し、五層以上の津波が発生したと報じられた。数年前に発生した地震ではインド

ネシアで二十二万人が死亡したのに対し、犠牲者は十人ほどであり、犠牲者が少なかったのは、前回の地震の教訓で、地震発生直後に住民がただ逃げたというのが理由である。

徳島県の旧家に伝わる文書には一五二一年から一八五四年までに起きた四回の地震の記録が残っている。最初の地震の津波では、その地域の三千七百余人が亡くなったが、最後の地震の津波では高さが九層あったのに亡くなったのは八人であった。この違いは「津波は矢よりも速く襲ってくるので、何一つ持たず、手近な高い所に避難すべき」と伝えたことによる。

地震被害の中で津波の恐ろしさを認識し、一人一人が家族や知人を助けるために、住居や仕事場の海抜や状況を調べ、自分ともしつ二人の命を救うため、浮輪代わりのペットボトル大を二個持って、近くの高い所へ逃げる訓練をするべきだと思う。

一日一題

名前にアルファベットを

総社市には文化功労者として顕彰された書家の高木聖鶴氏が住まれ、岡山県に在任して顕彰された芸術家は唯一である。その先生に毎年総社市の小学生の税に関する書道展の審査をお願いし、表彰状の名前を自筆で書いていただいている。それは大変価値のあるものといえる。

毎年、私が会頭賞を授与するのだが、

総社商工会議所会頭

清水 男

近年ふりがなをつけていないと読めない子供の名前が急増している。これは名前に使ってもよい文字や読み方が増えて、それを親が付けていくことによる。

中国を訪れてまず驚くのが看板に書かれた文字が略字で、これは毛沢東が奨励したものである。そして子供が最初に習う文字はアルファベットだと聞いた。

中国の唐が滅びたのは官吏の試験を難しくするために漢字を増やし、数字や常

識を覚える余裕がなくなつて、官吏の質が落ちたのも原因の一つである。

日本では平安時代にながが發明され、王朝文化が花開いたし、戦後常用漢字を少なくして、経済発展を遂げた。このまま常用漢字が増え続け、新しい造語が増え続ければ日本語は暗号化して、誰にでもわかる言語でなくなるのでは、と危惧される。

私を表現する言葉は英語では「I」だけだが、日本語では十や二十は思い浮かべることができる。漢字は何千何万とあるがアルファベットは二十六文字だけである。私は明治維新でなぜアルファベットを常用語に取り入れなかったか疑問に思う。

日本が繁栄し生き残るためには、語学力は必須である。現在日常生活でアルファベットは頻繁に使われている。そこで、子供の名前にも、アルファベットを使えるようにすれば、アルファベットは一気に広がり、新しい文化が創造できるのではないかと考える。

一日一題

論語と日本人

総社商工会議所会頭

清水 男

国際貢献で活躍されている方から以前、「海外へ災害援助に行ってお金を任せられるのはアメリカ人と日本人だけである」と聞いたことがある。アメリカ人は世界の警察官だと思っているからじゃないか、じゃあ日本人はどうしてだろうと考えた時、日本人は論語の影響を受けているからではないかと思った。

日本の古代を見ていくと、孔子の言行

を集大成した論語が日本に伝わったのが二八五年で、五三八年に仏教が渡来するよりずっと以前であり、その間日本人は論語ばかり勉強していたのではないかと考えられる。

学校で習う漢文で最初の文は、論語の「子曰く、学びて時に之を習う、亦説しからずや。朋遠方より来たる有り、亦樂しからずや。人知らずして慍みず、亦君子ならずや」である。「学んだことを機

会あるごとに実践、復習していけばやがて知識が自分のものになる。それは何と喜ばしいことか。親しい友人がわざわざ遠方から訪ねてきてくれた。何と楽しいことか。自分が正しいことをしているも世間は誤解、非難をするかもしれない。天も怨まず人も咎めず、自分の信じるところに向かって行動するのが君子である」と孔子は言った。

孔子は学習の大切さ、友情の大切さ、そして正義感を持つことの重要性を説いた。その教えは現代にも通じ、日本人の精神構造を形成する上で大きな影響を与えてきたと思う。

昨年私は総社市議会で教育委員長として答弁する機会があった。私は「孔子は一生を通じて守らなければならぬ言葉は恕で、それは自分にしていけないことを他人にしてはいけないことだと言った。私はその気持ちを持つ子供を育てたい。そして教育とは深い愛情と強い正義感を養成することだ」と述べた。

一日一題

釈迦の遺言

総社商工会議所会頭

清水 男

私は平成元年に総社青年会議所の理事長をしていた時、岡山県立大学の総社への誘致を提唱し、さまざまな活動をして誘致に成功した。その年には市町村合併の研究誌を作るなど、総社青年会議所で九つの新事業を行った。翌平成二年には時間に余裕ができ、世界の四大宗教の創始者に関して勉強し、釈迦の遺言を知った。

インド原始経典、長部経典によるとそ

れは「すべては無常である。怠ることなく実践し、それを完成しなさい」である。釈迦はある時「私の言葉はそれぞれの人が独自に解釈してよい」と言ったと大乘経典にあるが、私の解釈では「世の中も人も常に変化している。その変化を見極め、あなたの目標に対し常に努力して行動し、目標を完遂しなさい」となる。

平成十七年、経営学を創ったと言われ

るピーター・ドラッカー氏が現役の大学教授として九十五歳で亡くなった。彼は「イノベーション（革新）」とは変化を機会として利用するための手段である」と言った。日本の戦後復興にも企業に経営のアドバイスをして貢献したが、「ビジネスチャンスとは変化を好機としてとらえることである」と言っており、釈迦の遺言に通じる。

さて、現代は精神的な病に悩む人は多い。その多くが過去の不幸を引きずっている人だと思う。今は変化の激しい時代で、誰でも精神的に不安定になる時はある。周りの人や本人がそれを病気だと思うところから病になっていくと考える。不安定になっていたことがわかった時点でその人はもう正常なのだ。釈迦がある時「過去は過ぎ去ったものであり、未来はいまだ至っていない。現在の状況をそれぞれよく観察し、今なすべきことを努力してなせ」と言った。釈迦の遺言とセットにして考えると、生きる道標の一つになるのでは、と思う。

参考文献・参考資料

- 岡山県南部における南海地震の記録 備前県民局、2007年5月発行
- 岡山県通史 岡山県 昭和5年発行
- 市史等「都窪郡史」「昭和町史」「吉備郡史」「清音村史」「常盤村史」「上房郡史」「総社市史」「総社再発見」「岡山県水害史」等
- 岡山県気象災害史 岡山気象台作成資料
- 瓦版にみる幕末大坂の事件史・災害史 大阪城天守閣
- 水都大坂を襲った津波 長尾 武 平成18年発行
- 安政南海地震津波の教訓 長尾 武 大阪市史 大阪市
- 地震の事典 編集 宇津徳治・嶋 悦三・吉井敏剋・山科健一郎 朝倉書店
- 山陽新聞
- 日本経済新聞

資料作成につきましては、総社市総務課、総社市教育委員会、総社ライオンズクラブ事務局・株式会社三松事務局にご協力いただきました。

東海～日向灘4連動地震の津波対策と 総社市域の災害の歴史

2012年8月発行

編集・発行 清水 男

〒719-1126 総社市総社1033-1

電話 0866-92-2418